

しかしそれは大変な事である。第1に文献の蓄積の驚異的な増加に対し、どう整理・収蔵していくかという問題、第2にその多量な蓄積を活用するシステムをどうつくるかという問題にぶつかる。

収蔵の問題は、書庫の増築よりも、将来はマイクロ化、容積の圧縮に向けられよう。その技術が進んで、米粒くらいの所に何十冊もの本が整理されるようになるかもしれない。無論検索は自動化され、ボタンをおすと、所望の本の所望のページが開けられる、あるいは複写されるという事になるだろう。だが、利用の方はどうか。それだけ多くなった資料から自分の必要なものを見つけ出す、そのボタンを押すという学者・研究者とは、一体どんな人間だろうか？という思いが次にしてくる。

昔は万卷の書物を暗んじていたという大学者もいるが、大体はせいぜい数百冊の、時にはただ数冊の本を座右にして、学者は頭脳活動をしていた。その数冊、あるいは数百冊をえらび出したところに彼の学問があった——といえぬことはない。

とすれば、この利用のシステムの開発は、実は学問の本質にかかわる問題をふくんでいる。私は、司書といわれる人々の仕事の本当の内容が、現在どういうことになっているのか、よくは知らない。しかしこう考えてくると、それは多量の情報・資料の蓄積を資産として展開される将来の科学をいとなんでいくシステムの中で、いろいろシステムを創造し運営していくという役割をになっている、学者・研究者とまさるともおとらぬ全く新しい型の研究者でなければならないような気がする。

現在は実は金がなくてそれほど蔵書がふえることを心配しなくてもいい段階なのかもしれないが、大学の図書館はそういう大きな仕事の開拓に直面しているのではなからうか。

(工学部教授)

近畿地区農学系図書館懇談会発足

近畿地区国公立大学図書館協議会相互協力委員会は、さきに「大学図書館の相互協力活動」という報告書を出して、大学図書館間における相互協力は、いかにあるべきかを発表した。その手始めとして農学系図書館相互協力活動の組織作りを企図し、9月16日京都大学で会合を持った結果、近畿地区内において農学部を持つ全大学図書館（京大、京都府大、京都工芸繊維大、大阪府大、兵庫農大、滋賀短大、近畿大）を含めた「近畿地区農学系図書館懇談会」が発足した。

最近の科学技術の進歩はめざましく、またこれを発表する論文の数も年と共に幾何級数的に増加し、最低10年を見越して計画した各大学図書館の書庫掛をぼう然とさせている現状である。

殊に我が国においては、戦後各大学が戦争中の遅れを取り戻すべく、競って海外資料の導入に努めたため、ダブッタものはダブッタまま、無いものは無いままと、全く無謀に近いかたちで資料を導入して来たのである。

一方欧米では既に National Planning, Farmington Planning のごとく国としての取書計画を確立し、着々とその実を挙げつつある。近年経済の安定と、複写技術の発達も手伝い、我が国でもこのことに着目、相互協力の問題が大きく取り上げられて、特に主題別、分類別等質を同じくするものの結合の機運が高まってきた。このような時点で相互協力委員会の肝いりで「近畿地区農学系図書館懇談会」は発足し、今後の活動が大いに期待されている。

なおこの会の事務は当分の間京大農学部図書室が扱うことになった。